

明智光秀は 何故謀反を起こしたのか

本能寺の変『四国説』

後編

長宗我部元親と三好氏の阿波を巡る抗争と

明智光秀そして石谷家文書

令和2年7月3日 10日
徳島学博士 坪内 強

光秀、絶頂期からの転落

- 天正9年2月に、信長は京都で大規模な馬揃え（軍事パレード）を行なうが、この責任者として指名されたのが光秀であった。
- 大軍を差配できる立場に立った光秀は、得意の絶頂だったはずである。
- しかしその後の四国政策の転換や、秀吉の中国攻めへの与力としての援軍命令は、一度は「秀吉に勝った」と思っていた光秀に、深い失望感を味わわせることになった。
- 更に、自らが老齢に達していることを感じ、我が子光慶と明智家の将来を不安に感じていたのかもしれない。
 - 果たして、本能寺の変は何故起こったのか？

本能寺の変前夜

- 信長は京都・本能寺で自慢の38種もの名物茶道具を披露した茶会を終えて、僅かな手勢とともに本能寺に滞在していた。
- 一方の光秀は、中国攻めを行なっている羽柴秀吉の援軍を命じられ、およそ1万3千の兵とともに京都にほど近い亀山城にいた。
- 羽柴秀吉、柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益などの織田重臣たちは、各々、京都から遠く離れた前線に張り付いている。
- 徳川家康は、安土へ招かれた後、わずかな近臣と堺見物の最中。
- 織田信忠は、家康の接待役として共に堺を見物する予定であったが、信長の上洛を聞いて、数百の手勢と共に京都に滞在中。
- 光秀にとってこれは、信長、信忠父子を一挙に討ち取る絶好のチャンスといってもいい。
- この状況が生まれたのは、単なる偶然だったのか。それとも誰かが巧妙に仕組んだのか

本能寺の変 諸説

- **信長非道阻止説** 信長の「悪虐」は天下の妨げをなすので、討ち果たした
- **幕府再興説** 足利幕府に取って代わろうとする信長を止めようとした
- **四国説** 光秀や斎藤利三が進めていた長宗我部氏との外交関係をひっくり返したことに反発
- **野望説** 光秀が天下を狙った
- **遺恨説** 徳川家康の接待を巡り、信長から侮辱的な扱いを受けたり、人質となった母を見殺しにされたりした
- **突発説** たまたま信長が本能寺で手薄な状態であることがわかった
- **黒幕説** 光秀に指示をした黒幕としては、朝廷、足利将軍、イエズス会、家康、秀吉などがある
- **高年齢説** 老い先短いと感じた光秀が、その嫡子 光慶が14歳とまだ若く明智家の先行きを不安視した

信長非道阻止説

- 「父子悪逆天下之妨討果候」
- **光秀書状** 『武家事紀』 山鹿素行著

父子の悪虐は天下の妨げ、討ち果たし候。 其の表の儀、御馳走候て、大垣の城相済まさるべく候。委細、山田喜兵衛尉申すべく候。

恐々謹言

六月二日（天正一〇年）

西小 御宿所

- 「父子」というまでもなく、織田信長・信忠父子のことで、その「悪虐」は天下の妨げをなすので、討ち果たしたといっている。

江戸時代、信長の評価は低かった

- 江戸時代「信長は、仁も義も礼も知らない酷薄無残な男」とされていた。
- 信長公御身金石を欺くほどに、心を固く守り給いしによって人の非をもつての外に悪みいましめ給えり

(敵味方を問わず他人に対して厳格に過ぎ、狭量で思いやりがなかった)

「信長記」小瀬甫庵

- 親族を道具のように扱い、主君である足利義昭を裏切り、大功のあった老臣佐久間信盛らを追放し、言いがかりをつけて他の大名を滅ぼした「凶逆の人」である。
- わがまま勝手に、他人に厳格すぎ、残虐な行為をあえてする男である。
- すべて此人（信長）天性残忍にして詐力を以て志を得られき。されば、其終を善せられざりしこと、みづから取れる所なり。不幸にあらず

「読史余論」新井白石

彼の戦略や人材登用に関しては称賛する言葉もあるが、こと性格に関しては散々の評価であった。

本能寺の乱、四国説

- 四国・長宗我部氏と濃いつながりを持った光秀や斎藤利三
- 信長の四国政策転換が、光秀らを織田家臣団中で苦しい立場に追いやり、突発的謀叛を呼ぶ。
- 信長最後の言葉
「是非に及ばず、余は余自ら死を招いたな」
は、何を意味するのか？

四国説とは

- 四国説の元は、信長の四国政策の急転である。
- それまで長宗我部氏と織田氏は同盟関係にあり、光秀は取次役を務め、光秀の家臣(斎藤利三、石谷頼辰、)達は長宗我部家中と多くの姻戚関係を結んでいた。
- ところが石山本願寺が織田に降ったことで、四国の長宗我部氏の存在価値が信長にとって薄れ、むしろ織田一門領を四国にも拡大しようとした。
- 無論、長宗我部にすれば信長の裏切りであり、激しく反発。
- 信長は四国討伐に動き、光秀はその板挟みとなり、面目丸つぶれとなった。
- しかも、三好康長を支援するよう働きかけたのは秀吉であった。
- 秀吉とのライバル争いにしのぎを削ってきた光秀としては、到底認められない政策変更だった。
- この屈辱ゆえに、光秀は謀反に及んだのではないか、との説である。

長宗我部元親とは

- ルーツは大陸から日本に渡ってきた渡来人であり、姓を「秦（はた）」とするのが通説である。
- 秦氏の遠祖は秦の始皇帝と言われ、元親は「長宗我部宮内少輔秦元親」と「秦」を名乗っていた。
- 『元親記』には「秦能俊が土佐の国司となり、土佐に三千貫を拝領する綸旨を受けて盃を賜った」とある。

元親は、織田信長に遅れること5年。
天文八年（1539年）、土佐の地に誕生した。

- 父は、岡豊（おこう）城主で長宗我部家20代目の国親。
母は、美濃の守護代を務めていた斎藤利良(斎藤道三に毒殺された?)の娘。

幕府の奉行衆石谷家から正室を迎え入れる

- 永禄6年元親は、美濃齊藤氏の縁者である石谷光政の娘(桔梗)を正妻に迎えた。
- なぜ元親は遠い美濃国から妻を迎えたのか。
- 当時、將軍義輝が健在であり、幕府奉公衆の娘との婚姻は足利將軍家との結び付きができるという元親の思惑があったとされる。
- 石谷光政は、清和源氏・土岐氏の流れを汲み、また將軍足利義輝の奉行衆でもあった。
- 光政は13代足利義輝に仕えたが、永禄8年、義輝が暗殺されたことから、娘の嫁ぎ先である長宗我部家を頼って土佐に渡った
- 後継者がいなかったため、光秀の重臣・斎藤利三の兄にあたる頼辰(よりとぎ)を養子に迎えた。
- 元親と利三、頼辰は義理の兄弟になり、頼辰は明智と長宗我部を結ぶ実務者として、坂本城と元親の居城・岡豊城を行き来したと考えられる。

無鳥島の蝙蝠

- 元親は、姻戚関係にあった明智光秀の重臣・斎藤利三を介して、織田**信長**に**嫡男千雄丸**（後の信親）の**烏帽子親**になることと、併せて「**阿波への用兵**の了解」を求めた。天正3年（1575年）
- 使者に立てられたのは中島可之助（なかじまべくのすけ）という風変わりな名前の家臣であった。
- 中島は信長に謁見し、信長の「無鳥島の蝙蝠（鳥なき島のコウモリ）」に対して「蓬萊宮の寛典に候」という受け答えをしている。

（蓬萊宮= 熱田神宮 寛典=漢の天子 信長を褒めている）
- これがどうかして、我々常人には理解し難い言葉が交わされているのだが、**信長は元親の阿波侵攻**を許し、更には嫡男千雄丸の烏帽子親も引き受けているのである。
- **元親の思惑**と**信長の戦略**が一致したもので、元親の外交の巧みさと、**明智光秀の影響**力の成果である。

四国・長宗我部問題とは

- 元親が土佐国を平定したのは、国を継いで15年後の天正3年。
- **南海道**（紀伊、淡路、讃岐、伊予、土佐）と**西海道**（九州全土）を**手中**に治め、さらに**天下**をめざす、これが父・国親の遺志を継いだ元親の生きる**目標**であった。
- 信長は、**天正3年**、四万十川の戦いで土佐国を統一した元親に対して、**所領を安堵**し、長男（信親）の**烏帽子親**として**信の一字**と、「**四国の儀は元親手柄次第に切取候へ**」との**朱印状**を下し、四国の切り取り自由の許可を与えた。
- 信長も当時は阿波・讃岐・河内に勢力を張る**三好一党**や伊予の**河野氏**と**結ぶ毛利氏**と**対峙**しており、敵の背後を脅かす目的で長宗我部氏の伸長を促したのである。
- その際に**取次役**となったのが**明智光秀**であり、その重臣の斎藤利三の兄頼辰は、奉公衆石谷光政の婿養子で、義妹が元親の正室であるという関係にあった。

三好康長、信長に下る

- ところが、その直後**三好勢は凋落し、信長の脅威ではなくなった。**
- 本願寺が再び信長に反抗すると、康長はこれに呼応して高屋城に入った。
- **康長**は三好一族の中で最後まで畿内で抵抗を続けたが、**天正3年**（1575年）に信長に攻められ、4月8日に松井友閑を通じてついに**降伏**した。
- 同年7月、相国寺にて信長に赦免され、10月に所持していた名物「**三日月**」を**献上**信長に大変喜ばれ、一転して**家臣として厚遇**されるようになる。
- **康長は、本願寺との和睦交渉を担当**して10月21日に一旦和睦成立に成功させ、**河内半国の支配**も命じられる。

四国で争う親信長派の二勢力

- 一方、信長からお墨付きを得た元親は、天正4年から本格的に阿波に侵攻。
- 12月には、元親を後ろ盾にして、細川真之に率いられた一宮成祐、伊沢頼俊らが三好長治を攻めて自害に追い込む。
- 天正5年5月には、大西氏を逐い、白地に新城を築いた。
- 「先づはこの大西さへ手に入り候へば阿讃伊予三ヶ国の辻にて何方へ取り出づべくも自由なりと満足し給ひけり」『元親記』

親信長派 長宗我部氏と三好氏両陣営の抗争

- 天正5年、元親は讃岐国にも侵攻し、香川信景を服属して、その西部をほぼ平定した。
- 翌6年正月十河存保まさやすが堺から勝瑞城に入り、長治の跡を継ぎ阿波三好一族の力が復活の気配を見せる。
- その後も長治の遺臣及び長治の跡を継いだ十河存保と、細川真之に味方する反三好勢力の戦いは続き、反三好勢力は阿波に侵攻していた長宗我部元親と結びつく。
- こうして、親信長派である長宗我部と三好の両陣営が互いに抗争する事となった。

三好康俊を服属させたことを信長に報告

- 天正7年（1579年）12月
- 岩倉城主の三好康俊は、脇城主の武田信顕と共に長宗我部元親に降り、脇城外で三好氏重臣である三好越後守、矢野国村、川島惟忠らを殺害した。(脇城外の戦い)
- 天正8年（1578年）6月
- 元親は香宗我部親泰を安土に派遣し、阿波岩倉城の三好康俊を服属させたことを信長に報告した。
- また阿波征服のために、康俊の父三好康長が長宗我部氏に敵対しないように信長に依頼し、いずれも了解を得た。
- この頃は明智光秀が取次役として、元親・信長の交渉窓口となっていた。

三好康俊の元親服属を認める信長朱印状

- 「三好式部少輔事、此方別心無く候、然而して其面に於て相談せられ候旨、先々相通し候段、異議無く候条珍重候、猶以阿州面の事、別而馳走専一候、猶三好山城守申すべく候」

天正8年6月12日 信長 朱印

香宗我部安芸守殿

- 「三好康俊と阿波一国については、当方に依存は無い」
- 「その点につき相談した旨、先日確認した件、異議ないとのことは誠に大事のことである。なお、阿波方面については今後特別に世話すると、三好山城守（康長）から伝えられることになっている。」
- 阿波三好氏の一員ながら元親に服属した康俊の処遇を保証するもので、元親の意向を信長が承認する意味合いが強い。

三好康長 朱印状副状

- 爾来不申承候、**仍就阿州表之儀、從信長以朱印被申候**、向後別而御入眼可為快然趣、相心得可申旨候、随而**同名式部少輔**事、一円若輩二候、殊更近年就忿劇、無力之仕立候条、諸事御指南所希候、弥御肝煎、於我等可為珍重候、恐々謹言、

六月十四日

康慶 花押

香曾我部安芸守殿

御宿所

- **康慶(康長)も、元親の阿波平定を喜んでいることを表明。**
- 一族の三好式部少輔**康俊の処遇**を**元親に依頼**するという形になっている。
- 本貫の地を元親に奪われた康長の内心は複雑だっただろう。

元親・利三の危惧 秀吉宛元親書状から

- 長宗我部は、光秀以外に秀吉とも交流を持っていた。
- 天正8年6月19日秀吉から元親に当てた書状がある。
- 秀吉が、播磨に残る反織田勢力を掃討すると共に、因幡鳥取城を包囲している状況を元親に報告している。
- しかもそれを取り次いでいるのが斎藤利三である。
- 「秀吉卿へは、内々に齊藤内蔵助に元親頼み奉る由申されるにより」と土佐軍記に書かれている。

- 長宗我部側では、取次が光秀だけでは不安だったのだろうか。

- この後、秀吉が反長宗我部の行動に至った時、利三もまた長宗我部との関係との間で、苦渋の選択を迫られたと思われる。

本願寺の残党、雑賀衆と共に勝瑞城を攻める

- 天正8年、大阪本願寺の残党が三好氏を頼って阿波国へ入ってきた。
- 彼らは紀伊の雑賀衆と淡路の勢力を引き連れて、三好の本拠である勝瑞城を長宗我部方から取り戻し、続けて一宮城も包囲した。
- この牢人衆らに元親は思わぬ苦戦を強いられることになった。
- 同年11月に元親から羽柴秀吉に宛てた書状で、元親が秀吉に以下の旨のことを伝えている。
 - 紀伊の者が朱印状をもらって蜂起しているが、これは信長公のどういう命令か？
 - 上記の理由がわからないので、紀伊の者への攻撃を遠慮した。
 - 阿波と讃岐を攻略した暁には、西方の戦争を手伝わせていただく。
 - 紀伊の者を押さえてくれれば、阿波・讃岐両国の征服はすぐにも可能だ。
- 元親にとって想定外の出来事であり、瀬戸内海の制海権掌握にも関与していた秀吉を通じて信長の真意を確認したかったと思える。

長宗部氏、毛利氏らと協調関係を結ぶ

- 長宗我部氏は信長と対立関係にあった毛利氏とも協調関係にあった。
- 両氏に関係が生じたのは、天正5年7月に毛利氏が大西氏の長宗我部氏への服属を認めて以降のことである。
- 大西氏や讃岐の親毛利勢力で、天正7年（1579年）長宗我部氏の傘下に入った香川信景を通じて協調関係にあったと考えられる。
- 信長は、元親が力を持ちすぎぬように「一条氏の土佐支配を補佐している元親」と見なしたかった。
- 天正9年2月に、元親が娘婿でもあった一条内政を追放すると、織田政権と長宗我部氏の間には亀裂が入り始める。
- 長宗我部・織田の決裂に伴い、毛利氏と元親は天正9年8月までには讃岐天霧城にて対織田同盟を結んだ。
- また東伊予の金子元宅とも天正9年中には同盟を結んだ。

信長は四国政策の路線を大きく変更

羽柴秀吉の暗躍

- 信長は四国政策の路線を大きく変更した。三好氏への肩入れである。
- 羽柴秀吉は三好康長に接近して、天正7年11月頃には姉の子三好信吉(後の秀次)を養嗣子とし、康長と関係を深めた。
- 康長は本領である阿波美馬・三好の2郡を奪われると、天正9年、信長に旧領回復を訴えて織田家の方針が撤回されるように働きかけた。
- 天正9年3月には、羽柴秀吉と通じた康長が阿波の岩倉城に入って長宗我部方にあった同族の三好康俊を説得して織田方に寝返らせ、元親に圧迫を加えた。
- 同年6月、信長から香宗我部親泰に朱印状が与えられる。
- その内容は長宗我部氏に三好氏へ協力することを求めるもので、信長の四国政策が三好氏寄りに変わった事を示すものだった。

秀吉の淡路・阿波進出

- 天正9年9月、篠原自遁や東讃岐の安富氏も黒田官兵衛を介し、当時中国攻めの任にあった秀吉に人質を差し出して従属した。
- 秀吉も毛利氏に対抗するために三好の水軍衆が必要だった事もあり、官兵衛に淡路攻撃を指示した。
- 10月、秀吉は当時淡路志知城に進出していた官兵衛に、長宗我部氏に抵抗する篠原の木津城、森村春の土佐泊城への兵糧・弾薬の補給を命じている。
- 11月中旬、信長は羽柴秀吉と池田元助に淡路国侵攻を命じた。
- 元助は岩屋城を包囲し、由良城に籠城する安宅清康のもとに、家臣・伊木忠次と秀吉の腹心・蜂須賀正勝を送って投降を説得し、安宅清康を降した。
- 次いで岩屋城を攻略して生駒親正に守備させ、仙石秀久に淡路の支配を命じた。

信長の東四国政策から元親の排除

- 信長は、その直後堺代官の**松井友閑**を通じ天正9年（1581）11月23日付けで讃岐の国人安富氏宛に書状を出し、今般淡路島を制圧したことに伴い、三好康長に東四国（阿波・讃岐）の支配を任せることとしたので、軍勢を出して味方するよう命じた。
- この命令は、一方的に**長宗我部元親**がそれまで築いてきた**東四国の基盤を奪い、同地域から元親を排除**することを意味した。
- このように強硬な姿勢に出た背景には、東四国の平定の主役を元親から三好康長に切替える必要性が信長サイドに生じたということがある。
- また安富氏の勢力圏であった**小豆島**も同年中には秀吉の支配下に入った。
- 天正10年4月には**塩飽諸島**も能島村上氏から離反して秀吉に属した。
- 信長の政策に於いて、秀吉、三好康長そして松井友閑勢の意向が光秀、前久よりも重用される事態となっていたことがわかる。

信長の四国分令と光秀の苦境

- 信長は、明智光秀を仲介として長宗我部氏と友好的な関係を結んでおり、元親の阿波・讃岐の三好勢力への攻撃を容認していた。
- しかし羽柴水軍の阿波進出を機に、長宗我部氏と織田氏の関係は著しく悪化。その為に、仲介役を務めてきた明智光秀の立場も揺らぎ始める。
- 堺奉行の松井友閑は、三好康長と秀吉に通じており、信長に元親のことを「元親が、阿波と讃岐を制圧してしまえば、淡路島も制圧してしまい、信長の天下統一の妨げになる」と讒言した。

(本能寺の変の再検証 熊田千尋)

- 近衛前久による執り成しも効果なく、信長は、松井友閑の意見を重視して、四国政策について明智光秀・長宗我部元親ラインから松井友閑・三好康長・秀吉ラインに舵を切ったのである。
- 天正10年正月、信長は光秀を介して「阿波南部と土佐は与えるが、阿波北部と伊予は返上せよ」という内容の新たな朱印状を出して従うように命じた。(南海通記)

光秀にとって思わぬ強敵、松井友閑

- **松井友閑**は**奉公衆**として13代将軍義輝に仕えていた。しかし、義輝が暗殺されると、織田信長に従うようになった。
- 信長が上洛を果たすと、信長の右筆にも任命されている。
- **茶の湯**に精通していた友閑は、「名物狩り」でも、その才をいかんなく発揮。近習のトップとして政治的な分野でも頭角を現す。
- 友閑は、**連歌**や**舞**や**能**にも精通しており、**宗教者**として禅宗とも関わりが深く、文化的な任務を担い、**信長に重用**された。
- 天正3年頃、友閑は**堺の代官**に就任。**三好氏**との関係が深まったのもこの頃からだと思われる。
- 三好康長の投降交渉、本願寺との和睦工作、荒木村重や松永久秀の説得交渉にも奔走して、信長近習として重用された。
- その友閑が、**秀吉**、**三好康長**の意向を汲み、**信長**に長宗我部氏との**四国政策の変更**を迫ったのだ。**光秀**にとっては思わぬ**強敵**が現れたことになる。

- 『石谷家文書』によって、天正9年冬、安土の信長の前で長宗我部元親を悪様に罵る讒言者(松井友閑)と近衛前久・明智光秀との間で争論が行われていたことが明らかとなった。
- 信長は松井友閑の意見を重視して、一方的に東四国から元親を排除する措置に出た。
- すなわち、光秀は松井友閑に外交面で敗北したのである。
- ただ、信長は、元親が土佐一国の国分条件を受け入れるなら断交はしないとし、光秀はその説得交渉の使者を派遣した。
- しかし、その後信長は元親の返答を確認しないまま、三男信孝に四国出兵を命じ、一方的に元親を敵対視する措置に出た。
- この命令は光秀を通じた元親への説得中に出されたので、光秀の交渉は無視されたことになった。
- この二度にわたる信長の一方的な四国政策の変更により、光秀の謀叛の動機が形成されたと考えられる。

「本能寺の変の再検証 熊田千尋」

織田権力と長宗我部氏ついに決裂する

- その後、御朱印の面御違却ありて、**豫州・讃州上表申し、阿波南部半国、本國に相添へ遣はさるべし**と仰せられたり。

(伊予と讃岐は取り上げて、土佐と阿波半国のみ領有を認める)

- 元親、**四国の御儀は某が手柄を以て切取り申す**ことに候。更に信長卿の御恩たるべき儀にあらず。存じの外なる仰せ、驚き入り申すとして、一円御請申されず。

- 又重ねて**明智殿より齊藤内蔵助の兄石谷兵部少輔**を**ご使者**に下されたり、是にも御返事申し切らるるなり。 『元親記』

(明智光秀から、石谷頼辰よりときを遣わし信長の意向を伝え、従うように説得しようとしたが、これをも突っぱねてしまった。)

- そこで**信長**は、火急に**四国征伐の手配**をした。

織田権力の四国政策の転換と謀反

- 対毛利政策の進展と裏腹の関係
- 長宗我部氏の利用から切り捨てへの転換
- 光秀とその家中に大打撃
- 長宗我部氏と戦いになれば、長宗我部氏と親族、姻戚関係で結ばれた光秀とその家中は、敵味方に引き裂かれる
- 光秀には、その面目失墜の屈辱であると共に、織田家中での勢力衰退の可能性大であり、秀吉との競争に敗北することとなる。
- 更には、土岐一族である明智家と石谷家の崩壊にもつながる。
- また、光秀は取次役としては長宗我部の家中との関係に深入りしすぎていた。(取次役は時により敵とならねばならない)
- 自分たちを窮地に追い込んだ信長に対して謀反へと飛躍したのか？

織田政権の構造改革構想

■ 第一次構造改革 譜代家臣 ⇒ 実力派家臣

- 天正八年、譜代家臣佐久間信盛、林通勝、安藤守就、丹羽右近らを追放。
- 光秀、秀吉、滝川一益等実力派家臣を主流へ

■ 第二次構造改革 実力派家臣 ⇒ 織田家直轄への再編

- 三人の息子、信忠、信雄、信孝に重要な地位と領地
- 信忠 ⇒ 美濃、尾張、甲斐、信濃
- 信雄 ⇒ 伊勢、伊賀 信孝 ⇒ 四国
- 実力派家臣は各方面軍司令官として遠国に派遣、移封。
- 秀吉⇒中国、勝家⇒北陸、滝川⇒上野、更には光秀⇒出雲・石見へ

■ 第三次構造改革構想? 信長の唐入り フロイス「日本史」

- 日本国内を三人の息子に分割統治させる
- 有力武将は国外征服に派遣し、その地に領地を与える

三好康長、四国攻め先手として阿波に渡る

- 天正10年2月、信長が信州出陣のかたわら、三好康長に阿波渡海を命じる。
- 5月、康長は三千人の軍勢を率いて阿波に渡る。
- 信長卿ご子息三七殿へ四国の御軍代仰せ付けらる。先手として三好笑巖、天正10年5月上旬、阿波勝瑞へ下着す。
- 先づ一の宮・夷山表へ取掛り、両城を攻落す。 「元親記」
- 三好康長は勝瑞城に入り、阿波の親三好勢力を糾合して一宮城・夷山城を攻略する。
- 長宗我部方の野中三郎左衛門・池内肥前守らは一宮城主一宮成祐・夷山城主庄野和泉守を人質に取って牟岐に退却。

信長、四国攻めの朱印状を信孝に下す

今度四国へ至って差し下るに就きての条々、

- 一、讃岐の儀、一円其方に申し付くべき事、
- 一、阿波国の儀、一円三好山城守に申し付くべき事、
- 一、其外両国の儀、信長淡州に至って出馬の刻、申し出べきの事、
- 万事山城に対し、君臣・父母の思いをなし、馳走すべきの事、忠節たるべく候、よくよくその意を成すべく候なり、

天正十年五月七日

三七郎殿

- 誰に伊予と土佐支配を任せるかは白紙となっている。
- これは元親にとっては、本拠地の土佐の領有を否認されたようなものであり、信長による事実上の長宗我部元親討伐令とも解せられる内容であった。

神戸信孝、三好康長の養子となる

- 三七郎殿。阿州三好山城守養子として渡海あり

天正10年6月1日 「宇野」

- 信孝が三好氏の養子となれば、将来讃岐だけでなく阿波も織田一門領となることが約束される。
- これにより、四国東半における織田一門領の成立を迎えようとしていた。
- また、長宗我部の処遇は極めて厳しくなり、信長の意向次第で、長宗我部氏は改易される可能性があり、四国一円も織田一門領となる可能性も出てきた。

信孝、四国出兵 出陣準備

- 信長は四国遠征軍の副将として丹羽長秀、その義弟・蜂屋頼隆、津田信澄を付しただけでなく、『イエズス会日本年鑑』によると信孝に「一夜に大名にお成り候」というほどの人夫・馬・兵糧・黄金など莫大な贈り物を与えたという。
- 5月27日、信孝は兵14,000を従えて、安土に伺候した。
- その後、5月29日には信孝の軍は摂津住吉に着陣する。
- また織田信澄・丹羽長秀勢は摂津大阪、蜂屋頼隆勢は和泉岸和田に集結し、総勢1万4,000の軍が渡海に備えていた。
- 堺には、九鬼嘉隆率いる鉄甲船9隻を含む志摩・鳥羽水軍、紀伊海賊衆の100艘がすでに待機しており、信孝は堺でさらに200艘を調達して出航するつもりだった。

長宗我部、絶体絶命の危機

- 信長の長宗我部対応の急激な変更
- 利三を中心とした明智家中の親長曾我部派が憤慨

長宗我部氏の存在さえ揺るがしかねない事態に危機感を深める。

- 打開のためには、
 1. 信孝軍の四国渡海阻止
 2. ひいては信長打倒 しかない。
- 光秀もまた、信長の四国政策転換に対して
 - ⇒ 憤慨と絶望を味わっていた

本能寺の変は、 長宗我部元親・利三を救済するため？

- なぜ、6月2日に光秀が本能寺に信長を攻めたのか？
- 6月3日に予定していた四国征討が中止になったという結果からみて、光秀の動機は「長宗我部元親と齋藤利三の窮地を救うため」ではないか。
- 利三は齋藤伊豆守利賢の子として天文7年に生まれ、はじめ美濃の齋藤義龍、次いで、西美濃三人衆のひとり稲葉一鉄の家臣となったが不仲により一鉄の下を離れ、元龜元年明智光秀に仕えるようになった。
- 光秀の信頼を得た齋藤利三は筆頭家老に任じられ、丹波黒井城の城主となる。
- 徳川幕府三代将軍家光の乳母である春日の局の父としても知られる。

光秀の将来構想 崩壊

- 光秀は、長年における取次役を通じて長宗我部氏と朋友とも言える関係を築いてきていた。
- 近江、丹波、丹後、大和と近畿一円を勢力圏としていた光秀は、同じ土岐一族である石谷家を通じ、**長宗我部氏と連携して畿内・四国同盟**を結成する構想を描いていたと思われる。
- 自分が老いた後の子孫の繁栄の為に、織田一門の中で確固として存続できる**明智一族の地位**を確立しておきたかった。
- しかし、その構想は信長の四国政策変更により、脆くも崩れ去り、幼い**息子や一族の将来**に**暗雲**が立ち込め始めていた。
- また何よりも同盟者であり、長年の朋友である**長宗我部氏が滅亡**の危機に直面していた。
- このまま信長に従い長宗我部氏を見限るのか？
- 光秀の心中は穏やかではなかったと思われる。
- なんとしても、**信孝の四国渡海を阻止**せねばならないと決意したとしてもおかしくはない。

- このまま頑張り続けても「やがて**使い捨てにされる**のではないか」と光秀が考えるようになって、おかしくはない。
- 中国地方平定後に**九州攻め**が始まれば、光秀はその方面軍として派遣される可能性が高かった。
- もしその戦いに勝利しても、**九州の地に移封**されてしまう。
- 更に、**明国を征服**するための出征も予想された。
- 疲れた頭で考えても、光秀には相談相手がいない。
- 何でも話せた妻はもう死んでいる。
- 信長との仲介者であった妹の御ツマキも死んだ。
- 斎藤利三からは悲痛な訴えが届いている。
- そんな中で、中国地方攻めの大軍が、光秀の手中にあった。
- 疲れ果てた光秀の頭の中に、**謀反**の考えが芽生え、膨らんでいったたのかもしれない。

斎藤利三について

- 利三は天文3年（1534）斎藤利賢の次男として誕生する。
- 『徳川実紀』には「斎藤利三は明智光秀の妹の子」と記載あり。
- 利三は実兄・石谷頼辰と同じように幕府の奉公衆だったが、斎藤義龍に仕えるようになる。
- ところが同じく義龍の家臣だった稲葉一鉄が、斎藤家から離反して織田家に従属。利三はこれに従い、稲葉氏の家臣となる。
- 一鉄の家臣となった利三だが、一鉄といさかいを起こして元亀元年（1570）以降は親戚関係にあった光秀の配下になる。
- その後、筆頭家老として重用され、1万石の丹波黒井城主になる。
- 利三の母は石谷光政と再婚し、娘を産んだ。
- それが土佐の長宗我部元親の正室だ。
- 従って利三と長宗我部元親は縁戚ということになる。その縁もあり、光秀や利三は、長宗我部氏とは深く交わっていた。

斎藤利三、光秀の謀反を後押しする

- 利三の口利きにより稲葉家から**那波直治**を光秀が引き抜いた際、一鉄は信長に抗議した。(5月15日前後)
- 信長は激怒し、**光秀折檻事件**が起こったとされる。(日本史)
- 信長は、那波を稲葉家に返し、**利三を切腹**させるよう命じる。
- 信長の判断が下されたのは、本能寺の**変の4日前**であったという。
- さすがに利三の切腹に対しては、周囲のとりなしで撤回されるが、**光秀と利三が不満と不信を抱いた**としてもおかしくない。

(切腹を命じたのは創作とも)

- 特に利三は恐怖と怒りを覚えたに違いない。
- 縁戚の**長宗我部**を滅ぼそうとし、自分には**切腹**を命じた**信長**に対し、**利三**が主君**光秀**に何かを働きかけたのではないか。
- ちなみに、本能寺の変後の山科言経の『言経卿記』には、「日向守**斎藤内蔵助 今度謀叛随一也**」とある。

斉藤利三は謀反の首謀者か？

- 惟任退治記で**明智謀反の決意**とされている、愛宕神社の西坊での連歌の会(5月28日)での最初の四句

時は今 雨が下知(な)る 五月かな
尾上の朝け 夕ぐれの空
月は秋 秋はもなかの 夜はの月
深く尋ぬる山 ほととぎす

秀吉が「な」を「知」
に改ざんした

- 雨、空、月、山である。こうして並べてみると、「時は今～」にさほど特別な違和感が無い。
- 光秀が詠んだ句には、実は**信長を倒す**という**意味**など**存在していなかった**。この時はまだ**謀反の決意**が**出来ていなかった**とも言われている。
- 5月28日に伯耆国の国衆である福屋隆兼へ、明智光秀が出したという書状がある。
- この書状が事実であれば、本能寺の変直前の**5月28日**時点でも**光秀は謀反の決心は出来ていなかった**と言える。

- 謀叛を起こすには、今しかない。利三は何度も忠告した。
- しかし、踏み切れぬ光秀は、連歌会の前に中国遠征の必勝祈願という名目でくじを引いてみるが、結果は凶であった。
- 何度もくじを引いたがやはり凶であった。光秀はやはり謀叛は無理だという結論に達したのではないか。
- その後、5月29日に**光秀は中国地方に物資・武器を送っている。**
- 謀反を起こすならば、必ずその物資が必要になるはずなのに。
- この時点では、謀反を起こす気はなかった？

- 明智軍はこの後齊藤利三が独自に動き、そして謀叛に及んだのかも。
- 明智越から京に向かった光秀軍3千人は、利三の軍1万人より何時間も遅れて本能寺に着いたとの説がある。
- 光秀には信長を殺す意志は無かったが、光秀が着いた時には、既に信長は自害していたとも言われている。

織田信長死す

- 天正10年（1582）6月2日早朝、織田信長は本能寺とともに紅蓮の炎に散った。
- 中世を焼き付くし、「天下布武」を掲げた霸王は、重臣明智光秀の謀叛の前に自刃したのであった。
- その遺体は炎の中に消え去り、一つの時代が終わった。
- それはまた、新しい時代の始まりであった。

信長の最後の言葉「是非に及ばず」

- 信長最後の様子は太田牛一の「信長公記」に書かれていることが真実として伝わっている。
- 有名な信長最後の言葉「是非におよばず」も、信長公記に書かれているのが元で広く伝わった。
- しかし、当時牛一は丹羽長秀に仕えており本能寺には居なかった。
- 変の後に、牛一は信長の死の直前まで仕えていた侍女を取材し、この言葉とともに本能寺の変の様子を書き留めたとされる。
- 信長公記はそれらの記録を元に、関ヶ原の戦いの後、慶長期に書かれている。
- 信長の最後を実際に見た人で生き残った人は？
- 信長の女官？僧侶？黒人の彌助？
- 一般に知られている信長最後の様子は太田牛一の推測、想像か？

信長は本能寺で死んだのか

光秀も利三などの重臣も信長の最後を確認していない。

信長は本当に本能寺で死んだのだろうか？

その死体さえ確認できなかったと伝えられている。

「首を求めけれども更に見えざりければ、光秀深く怪しみ、最も其の恐れ甚だしく、士卒に命じて事の外尋ねさせけれども何とかならせ給ひけん、骸骨と思しきさへ見えざりつるとなり。」

秀吉は信長の遺臣らに対し、「上様ならびに殿様いづれも御別儀なく御切り抜けなされ候。膳所が崎へ御退きなされ候」と、手紙で呼びかけていた。

仮に信長が光秀によって確実に討たれたのが明らかとなっていれば、光秀に従った遺臣も、多かったのではなかろうか

本能寺の変の報が信孝軍に届く

- 6月2日早朝、本能寺の変の報が信孝軍に届くと、集められた軍勢のなかには、動揺し、逃亡したものも少なくなかった。
- また疑心暗鬼となり、光秀の女婿にあたる信澄を光秀との共謀を疑い野田城で殺害した。
- この戦いの後、信孝軍は戦力が半減しており弱体化していた。
- しかし、光秀は信孝軍には向かわずに、安土へと向かった。
- **天下取りを望む**なら、一気呵成に**信孝軍を一掃すべき**だった。
- そうすれば、摂津衆は明智軍に与したかもしれない。
- 秀吉の中国大返しの報によって動揺は沈静化し、信孝軍4千人は6月12日、摂津富田（高槻市）に着陣した秀吉軍に合流した。
- このとき、信孝は名目的にはあるが総大将に推された。

- 「明智が信長を殺した時には、都に接した津の国の殿達ならびに重立った貴族は毛利との戦争に赴いてみたのに、明智が盲目であって直に同日の諸城を占領させなかったことは、その滅亡の因となったのである。

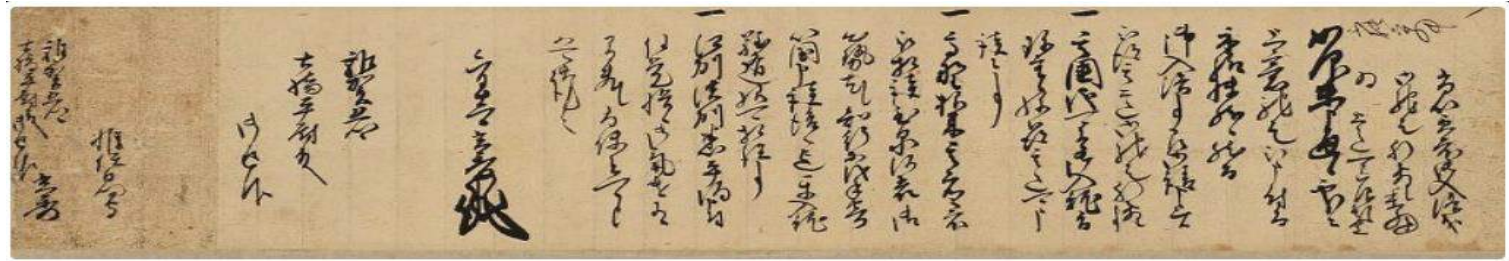
(フロイス イエズス会日本年報より)

- 「摂津に軍を滞在させていた信孝軍等の摂津の将たちを抑えなかったことに加え、高山右近に対しても彼を信頼しきり、人質など何も要求しなかったことが光秀が滅んだ要因である」とフロイスは指摘している。
- 光秀は摂津駐屯軍討伐もせず、親しい武将に対する調略も不十分、そして畿内にいた徳川家康に対しても何もできなかった。
- これは、光秀には黒田官兵衛の様な知将や、蜂須賀正勝のような外交交渉に強い策略者が居なかったことにも原因があるのかもしれない。

本能寺の乱の後、孤立無援の光秀

- 光秀は乱後の京の治安維持に当たった後、京以東の地盤固めを急いだ。
- これは織田家の本拠地であった安土城の周辺を押さえ、柴田勝家や徳川家康への備えを最優先したためと考えられる。
- その傍ら、有力組下大名に加勢を呼びかけた。
- しかし、縁戚であった細川藤孝・忠興父子は3日に「喪に服す」として剃髪、中立の構えを見せることでこれを拒んだ。
- また、筒井順慶は、秘密裏に秀吉側に寝返り、大和郡山城で籠城の支度を開始した。
- 更に、光秀の与力とされていた高山右近を始めとする摂津衆の多くが秀吉軍に味方する事となった。
- 光秀は信長を討った後で必要になる、京都周辺の勢力を維持するための同士を集める事前工作を、まったく行っていなかった。

土橋重治宛 明智光秀書状

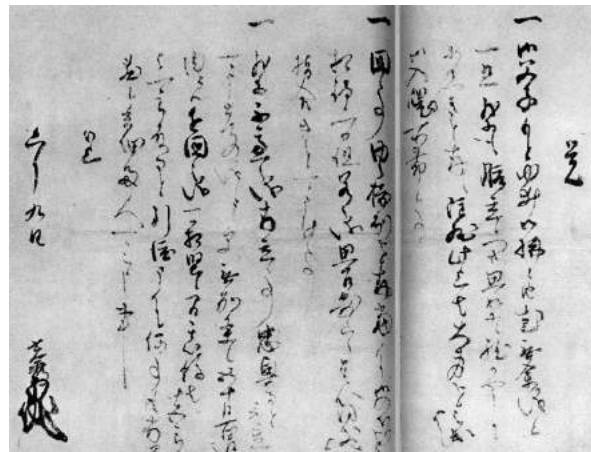


- 「土橋重治宛 明智光秀書状」の原本が発見された。
- 書状は天正10年6月12日、紀伊雑賀衆の反信長派リーダー、土橋重治に宛てたとされる。
- 書状は「将軍（義昭）のご入洛のことについては、ご奔走されることが大切です」と書かれている。
- 十五代将軍・足利義昭と光秀が通じていたとの内容の密書であり、「光秀らが義昭を奉じて室町幕府を再興させようとする政権構想がうかがえる」とされる。
- しかし、「義昭が光秀と連絡を取るために重治を使う必要があったことを示す書状でしかなく、**光秀の孤立無援を印象づけている**」との説もある。

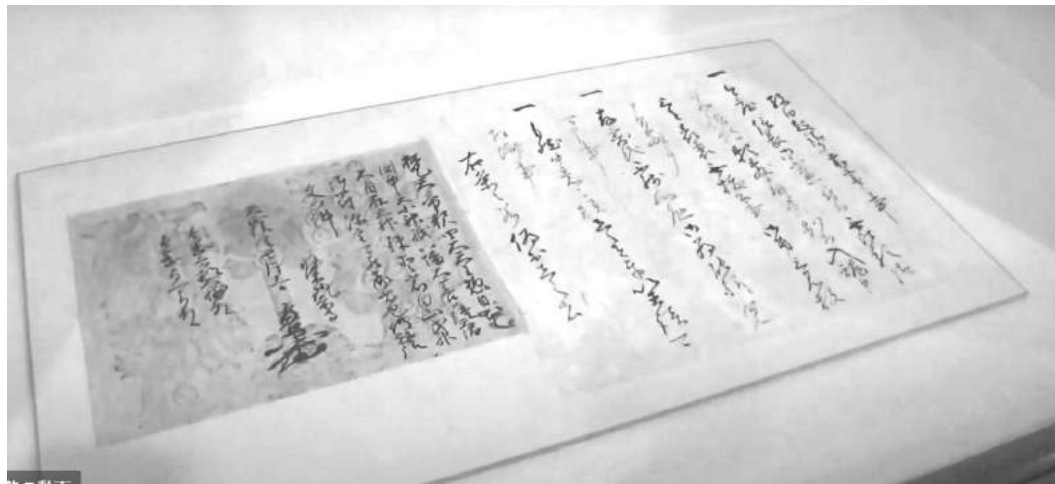
光秀の甘えと失敗 諸侯からの信頼を得ず

- 光秀は、**摂津駐屯軍(信孝)討伐も家康誅殺も果たせなかった。**
- 無二の親友であるはずの**細川藤孝も光秀には協力しなかった。**
- 藤孝の息子には自分の娘を嫁がせている。まして光秀と藤孝は、足利義昭を将軍職に擁立させる為に一緒に働いた間柄である。
- なぜ**細川父子**は姻戚関係までであった**光秀に加勢しなかったのか？**
- 藤孝が縁を結んだのはあくまで「織田家家臣としての明智光秀」であって、「織田政権に謀反した光秀」ではなかった。
- 更に、「本能寺の変」の約1カ月前、信長から藤孝のもとに、毛利攻めの準備をするようにとの書状が届く。そこには、光秀の指揮のもとで藤孝が動くことが指示されていた。
- これは、元家臣であった**光秀の臣下に下る事**になり、藤孝にとっては我慢できない**屈辱**であったはずだ。

- また、藤孝は、**光秀は天下を治める器ではない**と判断し、共倒れになることを避けたのではないだろうか。
- 更に、**忠興**が信長から直に感状を貰う等、高く評価されており、**忠興も信長に心酔**していた事も原因の一つかもしれない。
- **細川藤孝**は織田信長追悼の意向を表明して**剃髪・出家**。家督を細川忠興に譲り、**忠興**は妻の**玉**を丹後の味土野に蟄居させて、親子は明智光秀への協力を拒否した。
- 6月9日、明智光秀は、この状態の細川藤孝、細川忠興親子に向けて、加勢をなおも願う書状を送っている。



6月9日「明智光秀の書状」



藤孝親子宛の秀吉からの起請文

羽柴秀吉は、6月27日の「清州会議」で政治的主導権を握る。
そして7月11日、**藤孝父子**に「御身上見放ち申しまじき事」と書いた**起請文**を送った。花押の上に秀吉の血判が見える。
秀吉は、藤孝父子が光秀に与しなかったことを褒め、**入魂じっこん**を誓った。

実は、本能寺の**変の前**から**藤孝は秀吉と通じ合っており**、本能寺の変をいち早く秀吉に伝えたのは藤孝だったとの説がある。

「秀吉と心を合わせ、備中表に飛脚を遣わし」と惟任退治記に記載がある。

乱の後直ぐ、秀吉は、藤孝に光秀遺領の丹波を与え、11万石に加増している。
ここから時代は秀吉の天下統一へと動いていく。

石谷家文書

- 石谷家文書は、美濃国の武将、石谷光政・頼辰親子の書状など、天文4（1535）年から天正15（1587）年までの約50年間の史料3巻47通であり、
 - （1）長宗我部家に伝わるもの
 - （2）本能寺の変直前のもの
 - （3）石谷家の由緒や権利関係などに関するもの に大別される。
- 今回、注目を集めたのが（2）だった。
- このほか、天正6年12月16日、元親から頼辰に宛てた書状があった。長男に信長の一字をもらい、「信親」と名乗らせたと記されている。
- （3）の中では、三好長慶の書状が目立つ。石谷光政の知行を、長慶が保証している点が興味深いという。

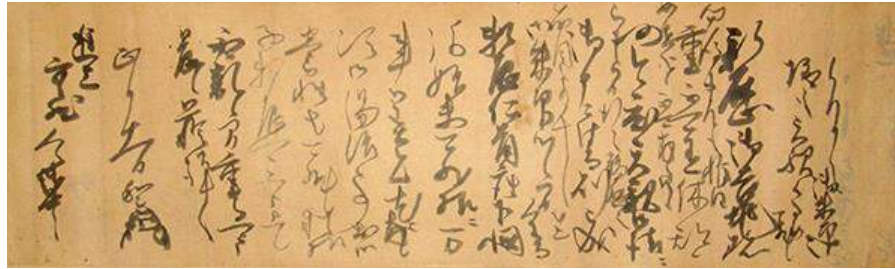
①中島重房・忠秀書状（天正6年11月24日）



- 長宗我部元親の家臣の中島重房らが、石谷頼辰・斎藤利三に宛てて出したもの。
- 天正6年に織田信長から元親へ出された「四国を平定してもよい」という朱印状に対する感謝の意を述べている。
- 見つかっていない信長の朱印状の存在が確認されるとともに、元親家臣らに元親と信長の関係が好ましいものと認識されている。
- 元親による四国平定の戦いが信長の了解を得て行われていたことの証拠となる史料である。

②斎藤利三書状（天正10年1月11日）

斎藤利三が実兄石谷頼辰の義父、**空然**（石谷光政）に出した書状。



織田信長は長宗我部元親に、天正9年の後半頃に、土佐と阿波半国しか領有を認めないと通達した。元親は承知せず、それを諫めるために利三が、石谷頼辰を使者として派遣した。

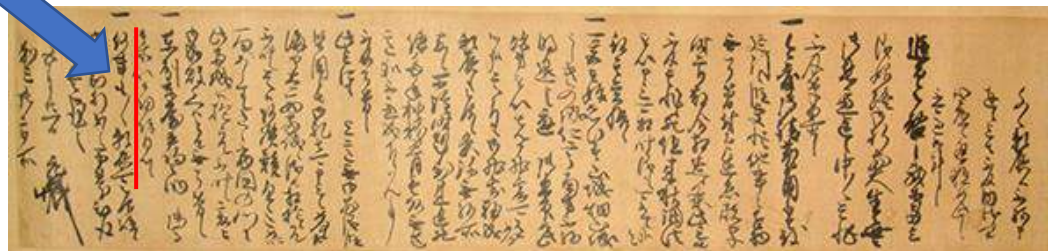
『長宗我部元親記』 『南海通記』

本書状は、**頼辰**を**派遣**する旨を伝えると同時に、空然に**元親の軽拳を抑える**ように**依頼**したもので、信長と元親との対立状況がわかるとともに、**利三が元親に働きかけを行った**確証である。

③長宗我部元親書状（天正10年5月21日）

何事も何事も頼む

長宗我部元親が斎藤利三に宛てた書状。



- 1月の時点では拒絶した元親だが、この書状では**信長の命令**（朱印状）に**従う**としている。
- 阿波国の一宮、夷山城、畑山城などから撤退しているが、海部・大西城は土佐国の門にあたる場所だからこのまま所持したいこと、「**甲州征伐から信長が帰陣したら指示に従いたい**」と、斎藤利三に伝えている。
- また「**何事も何事も頼む**」と重ねて依頼している。
- **元親の切羽詰まった気持ち**がよく分かる書状である。

斎藤利三の苦悩と決断

- 長宗我部元親が、斎藤利三に宛てた天正10年5月21日付書状には、**元親が信長の命令に譲歩**する意思が書かれている。
- しかし、信長は既に**2月**時点で**長宗我部征伐**の発動を行い、**5月7日**には三男信孝に**四国国分けの朱印状**を与えている。
- 元親が譲歩したといっても、織田信長は阿波を取り上げる方針を決めており、今更変更される望みはなかった。
- 時すでに遅しと言える。
- **利三**は、こうなったら「**信長の四国攻めに加担**するか、あるいは思い切って**謀反に立ち上がるか**。」の決断に迫られたと思う。

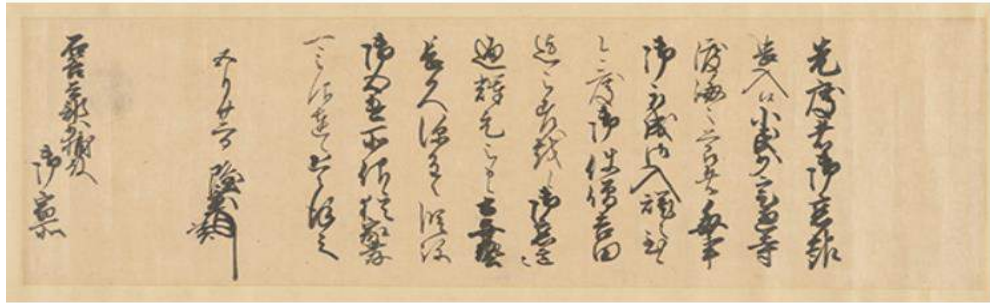
④近衛前久書状（天正11年2月20日）



△ ②近衛前久書状 天正11年(1583)2月20日

- 元関白の近衛前久が石谷頼辰・光政に宛てた書状。
- 本能寺の変で織田信長が自害した翌11年のもの。
- 信長に対して長宗我部元親のことを種々悪様に讒言する者がいて、信長がその讒言に同調して元親と断交しようとした時、前久らが元親を擁護して取り成した経緯が書かれている。
- 本書状からは、信長の四国政策変更には元親のことを讒言する者が居たことがわかる。元親を庇った為に、変の後、前久は信孝から光秀の仲間と疑われて家康の所に逃げている。
- その讒言者とは、堺奉行の松井友閑であると見られる。

⑤小早川隆景書状（天正11年5月22日）



▲ ③小早川隆景書状 天正11年(1583)5月22日

- 毛利輝元の重臣の**小早川隆景**が**石谷頼辰**に宛てた書状。
- 本書状は、本能寺の変の後、賤ヶ岳の戦いの直後に出されたもので、毛利氏の本拠地だった吉田（現安芸高田市）に長宗我部氏の使者が訪れ、それを受け入れた**輝元**も**長宗我部氏**との**安定した関係**を望んでいたことがわかる。
- この後、毛利氏は秀吉に接近し始め、元親は反秀吉陣営を貫いた。
- この時期の毛利氏と長宗我部氏が、お互いの出方をみるための駆け引きをしていたことがわかる。

本能寺の乱の原因について(私考)

- 何故、本能寺の変が起こったのか?
 1. 西国支配における織田家臣団(明智と秀吉)の派閥抗争と敗北感。
 - 秀吉の与力(部下)として西国に出陣命令 ⇒ 屈辱
 2. 斎藤家、石谷家一族そして親族である長宗我部の滅亡を防ごうとする利三の切羽詰まった思い。
 3. 織田一族による中央集権化と、西国転封に対する危機感
 - 佐久間信盛追放の理由は理不尽の一言
 - 信盛は全てを没収されて無一文となり、流浪の末、十津川溪谷沿いの寒村で病没(次は我が身)
- 光秀は、信長の元で家を維持発展させるために、長宗我部家と関係を深め、他家からの人材引抜きで家臣団を強化しようとした。
- それが信長の四国政策の転換と家臣団統制に抵触してしまった。
- その矛盾点の結末点にあったのが斎藤利三であった。

老齡の光秀は、我が子の行末を案じた

- 光秀の本能寺の乱当時の年齢は、明智軍記などから55歳とされている。しかし、明智軍記より信憑性が高いと言われる当代記によれば67歳と高齢である。
- 光秀たちまち天責を蒙り、13日に相果て跡形なく成る。明智歳67
- 山科にて百姓等に打ち殺される。歳67
- 67歳と高齢の光秀は、羽柴秀吉との出世争いに敗れるなど、用済みで佐久間同様に放り出されるのではと危惧したのではないか。
- 幼い我が子そして一族はどうなってしまふのだろう。
- 丹波一国はおろか、坂本城一つさえ息子に残すことは出来ないのでは。
- その不安感を、斎藤利三が更に後押ししたのではないだろうか。

本能寺の変の標的は家康のはずだった ...

おんな城主直虎

- 天正10年（1582年）3月に甲斐の武田勝頼を滅亡させた織田信長は、**家康**に旧今川領の**駿河**一国を与えた。
- 信長は、光秀に命じて、その”御礼言上”のために、同年5月半ばに安土城を訪れた**徳川家康**と、武田勝頼滅亡に格別の功があった武田の旧臣**穴山梅雪**を手厚く**饗応**する。
- 東国最大の敵である武田氏を滅亡させた後、長らく続いた『**家康の役割**（東への抑え）』が終わった。
- 東日本への進出を考えていた信長にとって、安土から関東へ行く手に立ちふさがる家康は”**役割を終えた邪魔者**”に過ぎない。
- 信長の思惑 ⇒ 最も信頼できる**光秀に、家康を討たす**。
- その後、三河へ向けて侵攻する計画であったのか。
- 4月には甲州征伐の帰り、信長は光秀と共に徳川領の偵察を行っている。

光秀に千載一遇のチャンスの到来

□信長の家康殺害の計画

- 「光秀に京の蘭丸より飛脚があって、中国出陣の準備ができたか陣容や家中の馬などを信長様が検分したいとのお達しがあった。」
- 堺の家康には、信長から6月2日に上洛すべく招集がかかっていた。

□信長の筋書き

- 家康と梅雪は武田征伐後の国分けで不満をいただいていた。
- 本能寺に着いた家康は、信長が余りにも無防備なことを知り、**急遽謀反**を起こそうとした。(とすることにする)
- そこへ、兵揃いの検分の為現れた**明智軍**が、**家康**を退治する。
- 信長は天下布武への障害となる家康を討つことを決意した。光秀もまた明智家の将来のために信長を討つことを決心したのだ。

□本庄惣右衛門覚書

信長を討つとは知らなかった。**信長の命令**で**家康を討つ**と思っていた。

- 光秀は**信長の計画**を**逆手**に取ったのか。

家康の伊賀越

- **家康一行**は、**徳川四天王**（酒井忠次、榊原康政、本多忠勝、井伊直政）を筆頭に、伊賀出身の**服部半蔵**など、総勢34名。
- 同行の**茶屋四郎次郎清延**は6月1日に先発して、京に向かう。そして、6月2日に変事を知り、急ぎ引き返し家康に報告する。
- 家康は直ちに領地三河への帰国を決意し、当日は山城国宇治田原城へ入り、翌3日は甲賀郡小川で宿泊、4日に北伊賀へ入り鈴鹿白子より船で、三河大浜へ無事戻ったとされている。
- 家康の逃亡では、茶屋四郎次郎が、行く先々に” 銭 ” を土地の土豪たちにばら撒き、家康の伊賀国無事通過の工作をして回った。
- 三河へ帰る『伊賀越え』の時は、服部半蔵手配の伊賀者190名が武装して家康一行の警護をしたと伝えられている。
- この時、家康は甲斐侵攻の邪魔になる**穴山梅雪**を切腹させている。

家康 織田家臣領地の甲斐国を侵攻

- 三河に戻った家康は、すぐには、**明智討伐**の為の上洛をせず、領地拡大を図った。
- 穴山梅雪の領地だった甲斐河内領を奪うとともに、翌6月5日に**旧武田家臣**の岡田正綱に、**織田家臣の領地**となった旧武田領地の**甲斐侵攻**を命じる。
- 織田信長より甲斐を拝領していた**河尻秀隆**も殺害される。
- 本能寺の変により、家康は、三河・遠江・駿河の三国に加え、甲斐・南信濃を手中とし、五国を領有する大大名へと成長する。
- 家康と、秀吉の二人は、本能寺の変をうまく利用し、申し上っていったと言える。

家康を逃がした段階で、光秀の思い描く夢は崩壊。

謀反は失敗。

- 光秀は、本能寺で信長、信忠を殺害した後、家康もその重臣共々殺害し、その後信孝を捉えようと計画していた。
- そして畿内から美濃そして尾張・三河を掌握しようとした。
- しかし、家康が上洛する前に謀反は起こり家康は三河へと逃走した。
- 柴田勝家への備えのために近江の安土城を抑えると共に、尾張や三河からの追討軍への対応を急ぐ必要があり、信孝等や摂津衆への対応が疎かになったのではないだろうか。
- もしも山崎の戦いで勝っていたとしても、家康が敵となれば、柴田勝家や滝川一益そして北条氏等と他にも敵は多く、光秀が勝ち残り天下統一する事は不可能であったと思える。

何故家康を取り逃がしたのか

- 光秀は、**織田信長、信忠**そして**徳川家康の誅殺**を企んだ。
- 6月2日夜に家康は京都に戻る予定であり、光秀はその後に謀反を執行し、信長、信忠と共に家康を襲うと予定していた。
- しかし、**利三が謀反を急いだ**。
- 長宗我部を助けるためには、信孝が四国に出発する前に信長を殺す必要があった。そして、**信長さえ殺せば利三の目的は達成**した。
- 「四国の儀を氣遣に存ずるによつて也、明智殿謀叛の事いよいよ差し急がるる」
- 「日向守内斎藤蔵助、今度謀反随一也」
- 家康や信孝を逃したことで、光秀の計画は大きく狂った。
- また、**共謀していた家康の裏切り**だったという説もある。

家康の裏切り説(家康共謀説)

- 信長からの誘いに従い、家康は、本拠地三河岡崎から最小編成のしかも徳川家にとって重要な重臣を連れて、安土に出掛けています。
- 同盟者の誘いとは言え、余りにも無防備である。
- 信長への感謝のための安土訪問に、武装した大勢の家臣を帯同するわけにも行かず、苦しい決断だったと思われる。
- **実は信長から家康殺害の命令を受けていた光秀は、事前に家康に知らせて、信長の命令を逆手に取った信長殺害計画を持ち掛けていた。**
- それは安土城での家康への接待の途中であったと思われる。
- 信長の誘いに恐怖を感じていた家康は、渡りに船と承諾、堺見物の後、光秀軍に合流すべく本能寺へと向かった。
- しかし、6月2日朝、堺を出発して本能寺を目指していた家康は、**既に**乱が起こり**信長が自害**したことを知った。

何か、打ち合わせとは異なる出来事が起こったのだ。

一瞬家康の心のなかに、危険を察知するシグナルが灯った。

此処で家康は、心変わりする。(元からの計画であったのかも)

家康は光秀との約束を破り、信長殺害の共謀者とはならず、むしろ被害者として三河へと逃亡。

すぐには信長追悼のための上洛はせず、信長家臣が領地していた甲斐国への勢力拡大を図る。

その後、討伐軍としてかあるいは、光秀への援軍として上洛の最中に、光秀が山崎の戦いで破れ、落ち武者狩りで死亡し、斎藤利三も捉えられて殺害されたことを知る。

結果として、斎藤利三は家康の命の恩人となり、家康は天下制服への道を進むことになる。

長宗我部とお福(春日局)

- お福の父は、斎藤利三、母は稲葉一鉄の娘である安。
- 本能寺の変の際、利三は当時4歳のお福を長宗我部に預けた。(稲葉一鉄が匿ったとも)
- 秀吉が死んでから元親の妻のお由は、お福を親戚筋の京都三条西家に猶子として出した。
- 摂関家に次ぐ格式の高い公家でそこで礼儀作法などを教わった。
- その後、稲葉正成と結婚したが別れて家光の乳母となる。
- 家康に気に入られ、春日局となり大奥の基礎を築いたことは有名。
- 家康がお福を、家光の乳母とし、後に春日局として重用したのは、利三に対する感謝の念からともされる。
- また、春日局は秀忠の側室で、家光の生母だとの説もある。

「秀忠公御嫡男 竹千代君 御腹 春日局」

(紅葉山文庫 松の栄え)

本能寺の変の後の元親

- 変の2ヶ月後、元親は勝端城を攻め落とし、阿波を手中に収めた。
- さらには讃岐へも進軍し、総勢3万6千の軍で十河城を陥落させた。
- 同じ頃、信長の後継者をめぐり、織田家臣団での勢力争いが行われていた。
- 清須会議で後継者を狙う豊臣秀吉と、それに反目する柴田勝家。元親は勝家側につくが、賤ヶ岳の戦いで勝家は敗死。
- 長久手の戦いの時、元親は家康とも通じ、秀吉の背後を突いて挟撃する密約を結んだ。
- しかし讃岐攻略に手間どり、軍勢2万の派兵準備が整ったのは秀吉が家康と和睦した後のことだった。
- その後も元親は侵攻の手を休めず、伊予の平定に成功し、天正12年末には河野氏を降伏させ、天正13年春までには西予の勢力もほぼ平定した。

ついに長宗我部氏、滅亡する

- 元親が四国統一を進めていた頃、毛利との領土問題も一段落し、秀吉にとって長宗我部元親だけが敵対した存在であった。
- 秀吉は天正13年6月、弟・羽柴秀長を総大将とする10万の軍勢を淡路、備前、安芸の三方面から四国に向かわせた。
- これに対する元親軍は総勢4万。
- 数だけでなく、一領具足で兵農分離が完全ではない長宗我部は秀吉軍の敵ではなかった。
- 阿波戦線が破綻すると、元親は秀吉に降伏。安堵されたのは土佐一国のみだった。戦功により蜂須賀家政に阿波一国が与えられる。
- その後、元親の跡を継いだ盛親が関ヶ原合戦で遁走、土佐は家康に没収された。
- 盛親は1615年大坂夏の陣で、捕縛され斬首。盛親を京都府八幡市で捕らえたのは、蜂須賀家政の家臣、長坂三郎左衛門である。
- ここに長宗我部氏が滅亡する。

光秀 本能寺の変後の生存説

- 京都宇治の**専修院**と**神明神社**には、山崎の戦いの後に明智光秀を匿った伝承が残されている。
- 『和泉伝承誌』によると、山崎の戦いの後に明智光秀が京の**妙心寺**に姿を現し、その後光秀は和泉に向かったと書かれている。
- 鳥羽の**本徳寺**には、一時、明智光秀が潜伏していたという伝承があり、「鳥羽へやるまい女の命、妻の髪売る十兵衛が住みやる、三日天下の侘び住居」という俗謡が残っている。
- **比叡山**の叡山文庫には、俗名を光秀といった僧の記録がある。
- 光秀が亡くなったはずの天正10年（1582年）以後に、比叡山に**光秀**の名で寄進された石碑が残っている。
- 岐阜県**山県市中洞**には、光秀が落ち延び、「荒深小五郎」と改名して関ヶ原の戦い頃まで生き延びたという伝承がある

光秀生存説 影武者説

山崎の合戦に敗れて小栗栖で討ち取られて死んだのは、光秀の影武者 荒木山城守行信という人物。

光秀は荒深小五郎と名を変えて故里の美濃国美山町中洞（現在の山
県市）に隠れ住み、その後は関ヶ原の合戦で東軍に味方せんと村を
出発するが、その道中で藪川（根尾川）の洪水に流され命を落とし、
この地で埋葬されたと言う。



明智光秀の墓所だと伝わる場所は各地に存在

- ・ 光秀「胴塚」(京都市山科区)
- ・ 光秀「首塚」谷性寺(京都府亀岡市)
- ・ 光秀「首塚」明智明神(京都市東山区)
- ・ 光秀「首塚」盛林寺(京都府宮津市)
- ・ 光秀夫婦の墓 西教寺(滋賀県大津市)
- ・ 桔梗塚(岐阜県山県市) ・ 光秀の墓(高野山奥之院)

尚、**土岐明智氏**は、その一族、明智定明の子の**菅沼定政**が、家康により**土岐氏への復姓**を命じられて土岐山城守を名乗り、その子孫が沼田藩主となって明治に至り、華族に列せられた。

家康により、**土岐明智氏**は滅亡することなく、**土岐氏の正統を継承**して存続した。

参考資料

- 多聞院日記
- 昔阿波物語
- 三好記
- 細川家記
- 惟任退治記
- 元親記
- 明智軍記
- 言繼卿記 山科言繼
- 信長公記
- 正親町天皇紀 編年資料 天正十年
- フロイス日本史 ルイス・フロイス著
- 石谷家文書 将軍側近のみた戦国乱世
- 戦国の活力 8 山田邦明
- 本能寺の変の再検証 熊田千尋
- 織田・徳川同盟と王権
- 織田政権の成立と崩壊
- 本能寺の変431年目の真実
- 夏草の賦
- 誰が信長を殺したのか
- 明智光秀と本能寺の変
- 明智光秀—謀叛にあらざ—
- 信長殺し、光秀ではない
- 謎とき本能寺の変
- 信長燃ゆ
- 検証本能寺の変
- 謎解き本能寺の変
- 決戦本能寺
- 光秀からの遺言
- 小林正信著
- 小林正信著
- 明智憲三郎著
- 司馬遼太郎著
- 桐野作人著
- 小和田哲男著
- 大栗丹後著
- 八切止夫著
- 藤田達生
- 安部龍太郎
- 谷口克広著
- 藤田達生著
- 葉室麟他著
- 明智憲三郎著